

一初詣を待つ当神宮一



発行者兼編集者
 鵜戸神宮
 社務所
 印刷所
 西日本印刷

今年を振り返り

宮司長 友安美

昭和五十二年も早や師走となり、氏子崇敬者の皆様方にはお正月をお迎えのご準備にて、愈々ご多忙の事と拝察いたします。

当神宮恒例の祭典及び行事も、お蔭をもちまして滞り無く終了、来たるべき新年の準備に万全を期して居るところであります。

扱て、本年もまた内憂外患交々の一年でありました。過激派による日航機乗っ取り事件、東本願寺爆破事件、なかならず天皇制打倒を旗印にしての、斯界最高の機関である神社本庁爆破事件等、寔に寒心に耐えない重大事件の続発でありました。

しかし、元号制存続の内閣告示や占領軍の神道指令以来この方、斯界人はもとより良識ある人々を悩ませ神社神道の大きな障害となっていた地鎮祭訴訟に就きましたは、最高裁の、否日本国民の公正妥当なる判決が下り、現場の神事に携わる神社人にとりこれ程心強い事はありませんでした。

更にまた、国際社会の一員として目を外に転じてみますと、米ソあるいは米中の接近による緊張緩和、エジプトのサダト大統領のイスラエル訪問、また最も身近な問題としては日米の貿易の不均衡による円高問題、それらの背景にあるとみられるGNP第二位の大国として一パーセントに

満たない防衛予算の問題等、変転極まりない国際状況を私共は黙視する事は出来ません。「日本国民が何時迄も米軍の駐屯に自国の安全を依存すると云う事は、個人的怠惰であり、国民的な回避であり、独立国家としての責任放棄であり、人間としてこの上なく不道徳である。」というこの一文は、自国の防衛に対する日頃の私の所信の一端を述べるに相応しいものであります。

内憂外患交々の一年を締めくくるに当り自由主義社会に於ける祖国の防衛という問題に対し皆様共々に思いを致し、来たるべき午年の飛躍に備えたいと思う次第であります。

新嘗祭

昭和五十二年十一月二十三日

例年に比べ暖かい日の続く初冬の十一月二十三日、黄金色のツワブキの花が満開の当神宮に於て、責任役員、氏子、崇敬者総代をはじめ敬神婦人会、官公衙代表等約百名が参列して、今年の新嘗祭は厳かに斎行された。

新嘗祭は、天皇陛下が新穀を天神地祇(すなわち、天神とは「アマツカミ」と呼び、高天原に生れ給うた神、または葦原中国(あしはらのなかつくに)に天降られた神々を申し、地祇とは「クニツカミ」と呼び、この国土に天降った天神の子孫、または初めよりこの土に生れた神をいう)にすすめ、その御恩に謝し、また親しくこれを聞食す神事である。

当宮でも新穀を感謝し、氏子、南那珂市郡民たちから数多くの献米、その他の作物の奉納があった。今年の新米奉納者は、大浦部落をはじめ、北郷坂元、倉迫、内之田、伊十川、中央区、新町、東郷甲東、乙東、

松永、殿所、平山、益安、酒谷、大谷部落などで、その他個人からも多数の献納があった。また、二年前から奉納しているクニツカミは新しく「八岐の大蛇の舞」を加え、本殿と儀式殿前広場で賑やかに奉納された。(写真)

- 今年のもかぐら々奉仕者は、次の鶉戸小学校の子どもたちであった。
- 籬の舞 香取 淳
- 弓の舞 外山 和彦
- えびすの舞 増川 暢久
- 剣の舞 香取 信之
- 献穀の舞 津田 朋子
- 品川 典江
- 片岡 大信
- 香取 里美
- 増川 暢久
- 香取 信之
- 三輪 信之
- 外山 まゆみ
- 米田 忍
- 長谷川 千津子



八岐の大蛇の舞

祝餅の舞

- 片岡 四郎
- 持原 公二
- 香取 大信
- 品川 典江
- 長谷川 千津子
- 津田 朋子
- 村中 朋子
- 香取 昭四郎
- 鬼取 昭四郎
- 三輪 信之
- 外山 まゆみ
- 米田 忍
- 長谷川 千津子



(写真右は八岐の大蛇の舞) (写真上は献穀の舞)

新役員などが決定

当神宮では、去る十月二十三日に氏子総代会、十一月十一日崇敬者総代会を開催、任期満了となった責任役員の改選を行った。この結果、崇敬者役員は、井戸川一氏、近藤雄一氏、河野宗泰氏の三氏が留任となり、新しく日南農協組合長川越国雄氏が選ばれた。一方、氏子役員は、全員が新しく入れ変わった。旧役員の方には三年間の神宮に対するご指導とご援助、誠に有難く感謝致しますと共に、今後共宜しく当宮に側面よりお力添え頂けますことをお願い致します。また、新役員の方には今後三年間、当神宮の発展と繁栄のために、ご苦勞願うことになった。委嘱式は十一月十一日に執行し官司より儀式殿において委嘱状が手渡された。

なお、これに伴い空席となった氏子総代会は、新しい三名の方々にお願いし、十一月二十三日に委嘱した。

記 昭和五十二年十一月十一日 責任役員を委嘱します。

- 井戸川 一
- 近藤 雄一
- 河野 宗泰
- 川越 国雄
- 鬼東 嘉市
- 鶴田 貞行
- 関屋 武義
- 高崎 正光
- 同 十一月二十三日
- 氏子総代会を委嘱します。
- 横内 守
- 鈴木 義嗣
- 関屋 秋光



ひむかいの塔追悼式に奉仕して

権 称 宜 黒 木 忠 仁

私は、沖縄県におけるひむかいの塔追悼式遺族団祭員の一員として、十一月十六日より二十日まで五日間それに同行した。折しも十六日は豪雨に見舞われたが、県庁での壮行式も無事終了、鹿児島新港より那覇丸に乗船し一路沖縄に向けて出発した。

海上は波が高かったが、四、五名の遺族の人が船酔いをしただけで、他の人は大丈夫であった。翌朝、六時に海上追悼式の予定であったが船の揺れが酷く、ここでは行なわれず、沖縄の北西に位置する伊江島の影にはいった地点で行なわれた。式典中の一分間の黙祷は、汽笛の鳴り響きと共に私の胸に熱いものを感させた。

午後二時半、沖縄上陸である。小雨の蒸し暑いのが、南方にきたのだという感激を一段と高めた。護国神社を参拝、次に海軍慰霊塔にて慰霊祭、この塔の深さには驚かされた。よくもこの様に縦横に掘り築いたものだ、また米軍の砲火がいかに激しかったか、戦争の悲惨な状態をまざまざと見せつけられ

た感があった。この後、琉球の面影が残っている、守礼の門などを見学し、宿泊所のくろしお会館へ向った。翌日、南部の方面へ行き、ひめゆりの塔、魂魄の塔を参拝し宮崎県戦没者の英霊が祀られているひむかいの塔にて追悼式を行った。プーゲンピリアの咲きみだれる中に静かにたたずんでいる塔での式典は、遺族の人々を涙の渦にまきこんだ。私はここで戦没者のみたまたちを慰め守っていくと誓うこと、尊き、大事さを体で感じとった。

式典終了後、摩文仁の丘、そして、玉泉洞等を見学して、中央納骨所に廻って、ここで慰霊祭を行った。この納骨所は本土とは違い個人個人の家々が大きな家型の墓を築き、墓の団地を呈している。沖縄の習俗に、家は貧しくともりっぱな墓を築く程尊ばれると聞く、これは南方の特異な習俗ではなからうか。

十九日は北西部の伊江島を訪れた。伊江島は周囲二十二キロメートルの小さな島で、中央部に一七二メートルの古生代のチャート式伊江城跡が立ち、西側

は軍用墓地が占めている。中央部の山は青々とし南の海にどっしりと腰を下し青い空にそびえている。沖縄八景に数えられるのもうなずける。この島に芳魂の塔が建立されており、その下に遺骨が収められている。当日は伊江村の村長さんをはじめ、村役場の方々が出迎えてくれ、遺族団の労をねぎらって下さった。

翌二十日、午前中自由行動、午後の飛行機にて官崎へ向った。この五日間の遺族団に同行して感じたことは、私たち戦争を知らない若者たちは、戦没者の霊を慰め祀ることを時代のいかなる変遷があろうとも忘れてはいけないであろうということである。またこの様なことをいかに子孫に伝えていくかが今後の課題であると思う。



ヨーロッパ駆け足(1)

権宮司 佐藤 美 春

出発

文化の先進国、ヨーロッパの國々を一目見たいものだ、かねてから思っていたところ、閑らずも有難い命令が出て、十五日間の予定で、九月一日日本を出発した。

政治家にしても、大体外国行きは夫人同伴であるので、私も家内を連れて行く事にした。私の結婚当時は戦時中にて、新婚旅行の沙汰ではなかったもので、家内には其の意も含め、旧婚旅行と銘打ってヘソクリを全部はたかせた。

九月一日、羽田空港で車の付いた大型トラックを、コロコロ押していると一端の紳士気分になるのもおかしなものである。ジャルパックの旅で何の心配もいらぬのであるが、なんとなく「海外旅行保険案内」に心を引かれ、子供のくれた餞別が旅行保険に化けてしまった。

午後七時、待合室で説明があり、バックに集った頭数はざつと五十人位であった。大方は中年以上で、若い女性も見え、ジパン組もいた。当初私は、多

分この組は見送りであろうと思っていたところ、いざ出国手続きとなつたらみんな列の中に並んでいた。

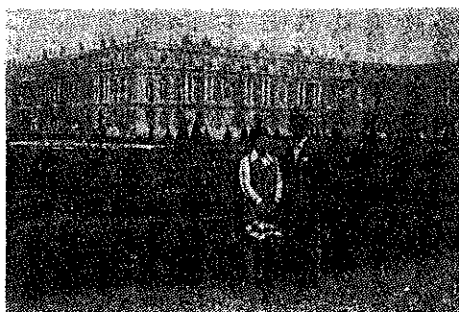
パスポートは、外国行のお守りである鶴戸さんのお守札と一緒に内ポケットに入れ、何度も外から確かめてみる。

機は日航のジャンボジェットである。午後十時、暗い羽田を飛び立った。

ツンドラ(北極圏)

機は北回りコースである。ウトウトしたと思つたらすぐ夜が明けた。鏗渺たる原野のアラスカ、アンカレッジ空港に燃料補給のため降りた。九月の初めというのに、ここは早や初冬の氣候にて冷え冷えとして、待合所のラーメンの湯気に人氣が集まった。

やがて機はまた飛び立った。お天気は上々、太陽がまばゆい。真昼というのに機窓は閉じさせられ、機内は暗くなった。一つには洋画の上映のためでもあったが、その後は、無理にも眠れぬとコンダクター(引率者)が言うがなかなか眠れ



権宮司夫妻

ない。明日に備えて、無理にもうつらうつらしている内に、朝食が配られた。つきさつき朝食を取つたばかりなのに、朝に二度の朝飯とは頭の調子も、胃の調子もおかしくなつてきた。

窓開け、が許されて外をのぞく

とツンドラである。一年の大部分は堅氷に閉ざされている荒原である。草も木も生えない、火口を無数に並べた様な山の状、果てしなく続く凍原の一部が溶けて泥の荒原に細い一筋の河が白く光って見えたのが印象的だった。

パリ(フランス)

いよいよ花の都パリである。気持は興奮気味なのに、身体の方は無事に着いた安堵と、十八時間の機内の疲れも加わってフラフラである。いや、フラフラするのも道理で、ここはフランスである。

入国手続きの係り官がヒゲをピンと生やしていかめしく、一人一人を入念にチェック、顔と写真を見くらべて、ポンポンと検印を押してパスポートを返してくる。私はすかさず、機内で勉強したのを一発笑顔で「メルスイボクウ」(どうもありがとう)。とたんに係り官のいかめしい面相がくずれて、ニコニコりうなずいた。

宿は、エッフェル塔の見えるセーヌ河畔であった。ホテルに荷物を置いて、ジャルパックのバスで早速市内見学である。まず、パリの象徴ともいえるエッフェル塔を見る。セーヌ河畔のシャン・ド・マルスの広場に立っている高さ三二〇mの塔で、一八八九年の万国博の際、フランス人エッフェルの設計で建てられたものである。この塔はまた、東京タワーのお手本でもある。

次に、フランス栄光のシンボル凱旋門を見る。ナポレオン

カともいわれているルーブル美術館を見学する。ここはかつて王宮として使われていたもので、建物も豪荘な世界最高の美術コレクションの殿堂である。翼を持つ女神像「サモトラケのニケ」「ミロのビーナス」「モナ・リザ」などの世界の名作のほか、ローマ、エジプト、メソポタミアなどの考古学的に貴重な発掘品、ルネッサンス美術品など世界の歴史に名だたるコレクションが三百万点もあるといわれる。

美術館を出て、各自、自由行動となった。雨が止んでお日様も出て来たので、Uさん夫婦と四人で地図を頼りに少し歩いてみる事にした。小さなレストランで、パンとコーヒーの腹ごしらえをしたのであるが、支払いをしてから改めて二十パーセント以上のサービス料をはずんだので、店主はニコニコ顔であった。

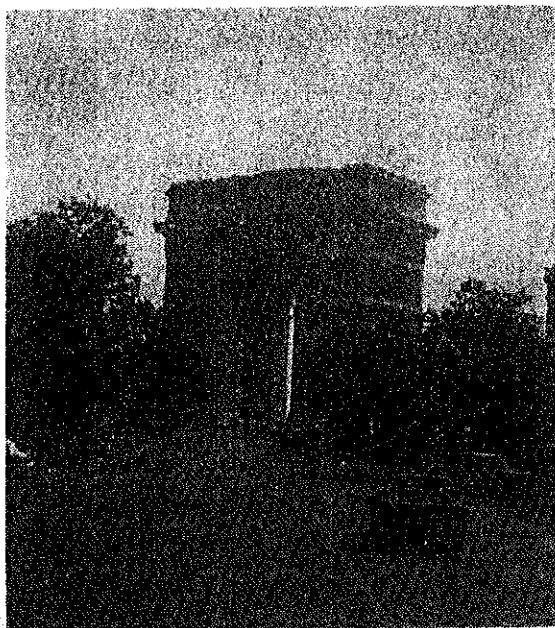
コンコルド広場から大通りを真直ぐ凱旋門へ行く。プラタナスの並木が美しい。歩道のかたわらのサルビアの花が人の心を和やかにする。道はきれいに清掃されている。広場も紙屑一つない。ましてやジュースの空きなどところがない。フランス人の厚い公徳心をそこに見

せられた。歩いてみると公衆便所が目に入り、とたんにもおよして飛び込む。きれいにしてある。すんでから番人のおばさんに十サンチム(六円)の硬貨を一つ「メルスイボクウ」と渡す。公衆便所はすべて有料である。その点日本は無料で、有難い事である。それなのに感謝の心も無く、よごしたり、落書きをしたり、はては便器を壊したり、本当に恥かしいことである。

シャンゼリゼ大通りの名店街で、高値(高値)の光る品々で家内の目を楽ませて、凱旋門に到る。門上に昇るエレベーターを待つ人の列が長く、昇るのをあきらめ、下より栄光の門を仰ぎ見、足許の無名戦士の墓に敬意を表した。日本のお墓は、大方地面より高くしてあるが、このお墓は地面と同じで、平らである。はげしい人通りであるから、土足にかけなければよいがと気がかかった。

(以下次号)

× × ×



パリ凱旋門

ら一三四年までの実に一八二二年の長い年月を費して造られた、まことにフランスの執念のこもった大聖堂である。バラ窓と呼ばれる世界一の華麗なステンドグラス(色ガラスや色を塗って、聖者やいろいろの模様を表したガラス)は、直径十三mもあり、まことにすばらしいものである。お賽銭をあげて敬意を表す。

お昼は、モンマルトの丘のレストランで、有名なカタツムリの料理であった。この丘では、若いアベックが道を歩きながら人目を憚らずチュチュ、チュチュ

ユとやっているのに三四組会った。他人はカタメツムリなさいという料理がこの丘で有名なものもある。

この日は快晴で暑かった。行く街々で目についた風景は、何れのレストランでも店の前にテーブルと椅子が、歩道狭しと並べられ、人々がそこに天から降しでのんびりと、楽しげにパンを食べたり、コーヒーやジュースを飲んでる。話を聞くと、フランスではよいお天気の日が少ないので、快晴の日はお天道様のお恵みを一身に受けんとし、日光浴するのだという。

鵜戸さんのうつりかわり

串間市 谷口 久美子

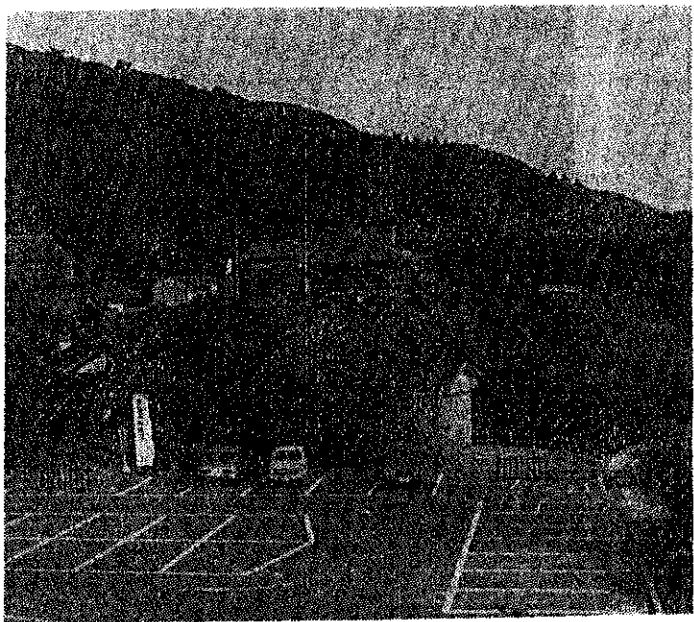
私達が物心ついた時から福島地区(現在串間市)では、鵜戸神宮の事を鵜戸さんと呼んでいました。鵜戸さんとは、鵜戸神宮の敬称であり、神宮を敬って鵜戸様となり、それが呼び易いように鵜戸さんの愛称で、郷土の人達に親しまれる様になったのだらうと思われます。

私がこの鵜戸さんの話を祖母達から聞かされたのは、昭和のはじめ、小学校六年生の時でした。その当時の交通機関と云へば、道路には客馬車が一台、一日に何往復かして大人の人達を運んでいましたが、小学生、女学生等は病気の時以外は乗らないものでした。しかし、遠距離になる飯肥から志布志迄の道には、乗合自動車といって、今の乗用車の様なものが一台、一日に何往復かしていました。その六年生の時、修学旅行で宮崎に行く事になりましたが、当時は旧南那珂郡(現在の日南市、串間市、商那珂郡)は、海路を利用しないと宮崎まで行くのは無理の様でした。私達も福島の今町港から船で行く事になり、夜中の十二時に船に乗り込

みました。始めての船旅に心配していた上に、母達から「鵜戸さんの沖は荒れるから気を付けなさい。」と云われたのが、始めて聞いた言葉でした。その母達の言葉通りに、鵜戸さんの沖を通過する時、大揺れに揺られて、各自の洗面器に六年生一同ほと

んどが吐きだして、髪の毛にも吐いたものがべっとり付いていたのを、今でも思い出します。それから後、鵜戸さんの沖を通る船毎に、あんなに揺れるものと子供心に思っていました。そしていつかは鵜戸さんにお参りしてみたいものだと思っていました。ところが、それが実現する日がいよいよやって来たのです。

それから六年後、私が鹿児島



— 当神宮遠景 —

の学校を卒業し帰省して間もなく、四月でしたが、宮崎市で始まる博覧会が開催された時の事です。父が、「博覧会に皆で見に行こう、行きは鵜戸さんにお参りしてあそこでの日の出を拝もう。」と云った時には、うれしくて、うれしくてどんなにお宮だろうかと、とても期待していました。いよいよその日、朝三時出発、車は父の知人の世話で借りてもらい、父母、伯母、私、第二人と、今でこそ定員がありますが、その頃は乗れる程乗り込みました。初春とは云い乍ら、夜中の起床は寒くて眠くて、目をこすりこすり起きた事を記憶しています。でも、家族で旅に出る事はうれしもので、いそいそと乗り込みました。あたりは真暗闇でしたが、鵜戸に着いた時は夜が明け出し、第一鳥居のところを降り、それから先は徒歩で八丁坂の石段を、ふうふう言い乍ら一段一段登り、そして下りきったところから山道になり、その道の両側に「おちゝあめ」を売る店がずらりと並んでいました。そこを通りはじめると、店のおばさん達が「おちゝあめはいらんかね。」と黄色い声を張り上げて客を呼んでいるのは、たまに参拝に来るお客をのがすまいとす

る、自分達の生活がかかっているのだらうと思うことが、珍らしいやら哀れさを感じたものでした。がいつしかその声にたづなれて竹の皮に包んである「あめ」をいくつか土産に買いました。いつの間にか、すっかり夜は明けて、店を通り過ぎると右側に太平洋の海が見え、遙か彼方の水平線上から大きな太陽が顔を出しはじめたのを、驚いて眺めました。「まあ、きれいな太陽。」と自然と頭が下り、私の姿勢は最敬礼の姿勢へと変わりました。この偉大な太陽を見せてくれたこの周辺の景色にしばらくは皆、みとれていました。太陽全体が水平線上の彼方から姿を見たのは、これが最初でした。太陽の上のと同時に鵜戸さんの太鼓橋(玉橋)を渡りましたが、この橋にも「常日須臾を云う人は、この橋が大蛇に見えて、よう渡らんそうだよ。」と聞かされていました。腹物をぬいで渡りきった時、「自分は嘘をついた事はなかったんだな。」とホッとしました。石段を下りて岩屋の中に鎮座まします神のお社を見た時には、さすがに神話の国、日本の「しるし」だと感嘆しました。このお社が、いわゆる鵜戸さんの本体なのだとなり、又実在されていたの

で、成程とうなづく事ができました。昔から住んでいた土地の人達が、てくてくと歩いて鵜戸さん参りをし、人から人に語り伝えられて、鵜戸さんの御利益を信じてきたのだらうと思われましました。私達は鵜戸さん全体の景色、門前町の「おちゝあめ」の店を脳裏に収め、一路宮崎へと鵜戸さんを後にしました。あれから四十五年経った今日、交通も便利になり、鵜戸さんにお参りしてみました。ところがどうでしょう。その変わりようは、あの時の山道は舗装された道路になり、「おちゝあめ」の門前町が三階建の鉄筋層根に変わり、周辺の景色は目も鮮やかな朱塗りの大鳥居、儀式殿となつています。昔の面影をしのぼうにも、あの鵜戸さん時代の素朴な姿はなく、今はれつきとした近代建築を誇る、礼装をしなくては近寄り難い、大鵜戸神宮の姿になっていきます。

考えてみれば、これが今の文明園にふさわしいお宮であり、観光地であり、又宮崎県の誇りでもありましよう。これからの鵜戸神宮は又、日本国の宝でもありましよう。こうして私が経験した鵜戸さんの思い出とうつりかわりは、年老いてもなお考え続けることでしょう。

職員異動 (6)

八年三十一日 定年に依り其の職を解く

- 権称宜 後藤 栄策
守衛 平下 与平
宮本 米作
横内 守
松浦 被義
水口 行光
平下 フヂエ

九月一日 守衛を命ずる
杉原 与市
関屋 宗憲

九月十五日 守衛を命ずる
中川 文明
中川 和子

十月三十一日 巫子を命ずる
掃除婦を命ずる
中川 和子

十二月二十日 願いに依り其の職を解く
巫子 津曲 美代子

社務日誌抄

- 六月二二日 島根県神社庁鹿足支部支部部長角河貞雄氏他参拜
奈良県大神神社権宮司越義寛氏他参拜
最高検察庁検事総長神谷尚明、也参拜
七月二三日~二四日 御神幸祭
七月二九日~三十日 九州地区神青協研修会に神職二名出向(長崎)
八月十一日~十七日 長崎県龜山八幡宮官司河原進氏他参拜
八月二三日 九州・山口地区神道青年会野球大会に神職五名出向(宮崎市)
八月二三日 九州・山口地区神道青年会野球大会に神職五名出向(宮崎市)

八月二八日 南那珂神社総代会当宮儀式殿にて開催
九月十二日 新編県志神社平塩権称宜他参拜
九月二二日 下関市龜山八幡宮山川権称宜他参拜
九月二二日 熊本県阿蘇神社官司阿蘇惟友氏参拜
十月十七日 神嘗祭当日祭
十月二二日 皇子神社例祭
十月二二日 北海道神社庁十勝支部支部長大野重興氏他参拜
十月二二日 責任役員会
十月二五日 氏子総代会
十月二六日 福岡県宮崎官称宜米田氏他参拜
十月二九日 神宮研修所主事田村幸吉氏他参拜
十一月三日 明治祭
十一月五日 氏子総代会
十一月七日 崇敬者総代会
十一月十一日 新役員委嘱式
十一月十五日 七五三祭

十一月十五日 北海道神社庁上川支部支部長柴田直孝氏他参拜
十一月十六日 富山県雄山神社権宮司佐伯敬吉氏他参拜
十一月二二日 近江神宮称宜神林茂明氏参拜
十一月二三日 新嘗祭
十一月二五日 陸上自衛隊団分駐屯地第十二普通科連隊中隊長富永義克氏他参拜
十一月二八日 宮崎、鹿児島両県神青野球対抗試合に神職二名出向(都城市)
十二月三日 火産靈神社例祭
十二月五日 第二回巫子化粧講習(鵜戸河原幸子さん)
十二月十五日~十七日 権宮司神宮月次祭奉仕のため伊勢出向



鵜戸山散歩 (6)

紙開発記念石燈籠

当神宮境内には、多数の石燈籠が建っており、年間を通じて夜の参道を明るくともしている。今回の鵜戸山散歩は、これら石燈籠のうち特に、「紙開発記念の石燈籠」を紹介してみた。

江戸時代、この地方を治めていたのは、飢肥藩伊東氏である。伊東氏は、その祖を工藤祐経とし、日向国(今の宮崎県)には鎌倉初期の建久元年(一一九〇年)、初めて地頭職として赴き、その後伊東家第六代祐持が今の西都市都於郡に城を構え、また

第十三代祐兵は、今の日南市飢肥地方を領して、第一代の伊東家飢肥城主となったのである。これより、伊東氏は当神宮に對し、度々社殿の再興を行うなど、篤志な崇敬を捧げてきた。

そのうち第十三代祐相は、藩内の殖産興業によって藩の財政を潤そうと、楮の栽培を初めたのである。このことは、江戸幕府の勸農政策と相まって、諸藩においても同じことが施行され、五穀(米・麦・粟・黍・豆)、四木(桑・茶・楮・漆)、三草(藍・麻・紅花)を初め、甘藷、

蜜柑などの栽培が普及、また林業、牧畜、水産業が各地において大いに興ったのである。

当飢肥藩にあっては、南国の高温で雨量が多い気象条件を生かして杉の育成に務め、飢肥林業を興すと共に、楮(くわ科の落葉低木。樹皮は和紙製造の原料。)を当神宮境内を初め藩内各地に一千万本を植え、これを栽培して和紙の製造を行い、殖産興業を図ったのである。これが飢肥藩の紙開発である。

このような楮の栽培は功を奏し、良質の和紙(飢肥紙)を生産し、藩の台所を潤したのであるが、この紙開発事業に全面的資金援助をして協力したが、今回の主人公、油屋善兵衛であ

善兵衛さんは本来、両替屋(今の銀行に当たる)のもので、金、銀、銭の交換、手形振出し、貸し付け、預金などの業務を行い、諸藩にも金を貸し付けた。

を営む、大阪の商人である。この人は、すこぶる敬神家であつたらしく、飢肥藩の紙開発を当神宮に祈願し、その成功を感謝して、当時の鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺、第五十三世別当、隆長の代天保三年(一八三二年)八月に石燈籠一対を奉納している。

今もこの高さ(台座含)三一〇センチメートルの燈籠は、楼門前の両脇に厳として建てっており、(写真)台座には、

紙開発
願主
大坂住
油屋

善兵衛

と記され、またその側面には「油屋治兵衛、四郎兵衛」など四名の油屋一門とみられる名前が刻まれている。

このようにして奉納された石燈籠一対は、江戸天保年間より一四五年を経た今日もなお日南市文化財として、善兵衛さんの紙開発の努力を顕彰し、敬神の誠を示すかのように、明るく燈をともし続けている。

(本部)

編集後記

「光陰矢の如し」とは言え、まったく時の流れは速く、昭和五十二年もはや暮れかかろうとしておりますが、皆様年末ご多忙の事と拝察致します。

ここに社報第十号をおとどけ致します。

本号は、先ごろ行なわれた新警察とその奉納行事を中心に、ヨーロッパ旅行の紀行文、それに新責任役員紹介などを掲載してみました。

本年は、政治経済両面において、我国にとって未曾有の危機がおそいかかって来た年でした。また社会的には、極左翼集団たちの傍若無人な暴力、世界を飛びまわるハイジャッカーたち、まったくあきれかえるばかりです。

今後我が日本が、国際社会の中で世界を動かすスリーエンジンの一國としてどう対処、けん引していくか、一人の国民として深く係わりあつていかなければならないでしょう。

この一年間、当編集部に暖かい指導、ご援助を賜りました。ありがとうございます。

皆様よいお年をお迎え下さいますよう折り居ります。

(本部)



一日南市文化財石燈籠一